

IAU 第 20 回 総 会

杉 本 大 一 郎*

国際天文学連合 (IAU) の第 20 回総会が、さる 8 月 2 日から 11 日まで、米国ボルチモア市で開催された。IAU は日本学術会議が加入している国際学術団体のひとつである。そして、天文学研究連絡委員会がそれに対処する委員会、その英訳名は National Committee for Astronomy とされている。私はその関係で派遣され、いくつかの委員会に出席したので、その観点から報告する。

最初と最後の日には総会があったが、その間は科学的会合が続いた。IAU は天文学の各分野に分かれて 40 のコミッションからなる。コミッションの会議は、会合の表題で数えて 170 に及んだ。そのほとんどが科学的内容のものであるが、コミッションのビジネス会議も含まれている。いくつかのコミッションにまたがるものは、7 つのコミッション連合会議で論じられた。多くのコミッションにまたがって興味を持たれる、さらに大規模なトピックスについては、7 つの連合討論会がもたれた。「大マゼラン星雲の超新星 1987A」がその例である。

ボルチモアのコンベンション・センターはこれだけの会議を収容できる場所であった。今回の会議の開催地として、宇宙空間望遠鏡科学研究所 (Space Telescope Science Institute) のあるこの地が選ばれたのは、そのときまでに宇宙空間望遠鏡が打ち上げられると期待されていたからであったが、そうならなかったのは残念であった。会議を収容する時間のほうは、ずいぶん詰まったものであった。各コミッションの都合は会議の準備段階で尋ねられたが、結果的には、出席したかったり、責任上出席しなければならない会議がいろいろと重なってしまったようである。

IAU に参加している 51 ケ国のほとんど全部と、今回新しく加入することになったアルジェリア、アイスランド、モロッコ、サウジアラビア、マレーシア、ペルーから、全部でおよそ 1700 人の天文学者がボルチモアに集まった。そのうち、日本人は 50 名あまりであった。今回の総会で新しく入会を認められたのは 800 人にもおよび、メンバーの総数は 6800 人にもなった。そのうち、日本の新メンバーは 40 名、総数は 322 名である。これはアメリカのメンバーの 6 分の 1 である。また、西ドイツとほぼ同じだが、国の総人口の違いを考えると、日本のメンバー数はまだまだ少ない。諸科学のなかで天文学が占めるウエイトの違いを表しているのであろうか。

今総会での最大の目玉は、国立天文台長の古在由氏が次期 (1988-1991) の IAU 会長 (ユニオンのプレジデント) に就任されたことである。このことについては、別に記事が書かれると聞くので、そちらを参照してもらいたい。今回から新しくプレジデント・エレクトという役職ができ、A. A. ボヤルチュク (USSR) が就任した。これは、特別のことがなければ、その次の期の会長として予定されているものである。コミッションのプレジデント、日本流にいうと委員長には、日本人からは、宮本昌典 (No. 8 位置天文学)、佐藤勝彦 (No. 47 宇宙論)、森本雅樹 (No. 40 電波天文学副委員長) の 3 氏が

なられた。今期 (1985-88) の 5 氏に比べて、やや寂しいが、メンバー数の比率から見ると、少なすぎるわけではない。

次回 (1991) の IAU 総会は今期の会長であった J. サハデ氏の国、アルゼンチンが招待し、ブエノス・アイレスで開かれることになった。その先のことはまだ決まっていないが、日本はどうかという声も多い。ほかには、中国が招待することを考えている。東ドイツも考えていたが、諸般の事情から 1991 年には難しい様子と聞いた。国際社会における日本の科学の地位を考えると、いずれ日本にも招待しなければならないだろう。そのことに関し参考になるかもしれない事を、以下にいくつか述べる。

総会中にもたれた財務委員会で、総会を開催するのにかかる費用のことが話題になった。今回は 150 万ドルもかかったが、そのうち IAU が直接に負担したのは 10% 程度である。アメリカでは、NASA と NSF が 40% という大口の負担をしたので、総会を開催することができたが、国によっては、そのような巨額の費用のために招待が不可能になるのは問題である。(もっとも、各国の事情によって、必要額も一定ではない。日本では、1990 年には外国からの参加者が 1000 人以上という大規模国際学会が少なくとも 5 つは計画されている。)

このことに関連して、会員数の増加にもかかわらず、総会参加者が 1970 年以來、減少の傾向にあることも問題になった。今回は多くのアメリカ人が、総会に前後して開かれた 14 の IAU シンポジウムとコロキウムだけに出席し、総会には現れなかったのではないかと解釈された。しかし、同じような事情にあった 1979 年のモントリオール総会でも、今回と同じ数の参加者があったのである。

この問題は総会のもちかたにまで関係しているのかもしれない。総会よりも特定のトピックスをより専門的な集団で議論するシンポジウムなどに重点をおくほうがよいのか、逆に、総会のように天文学のあらゆるディシプリンの人たちが集まって分野間の科学的交流を行なうほうがよいのか、それとも、可能なら、それらのシンポジウムもすべて同一会場で行なうのがよいのであるか。このことについても議論があったが、結論はでなかった。IAU の限られた予算と研究者の限られた時間をもっとも有効に使おうという点では一致しているのだが、実際上のことについては、一律にはいかないのである。

以上で IAU の話は終わるが、この場をかりて、学術会議のことも、少し報告させてもらいたい。第 14 期はさる 7 月 22 日に発足した。25 日から第 105 回総会がもたれたが、そこでは新しい役員と委員会がきめられただけで、今期の方針については、もっか、委員会で検討中である。10 月 19 日からの総会で具体的な方針が決まることになっている。今後も逐次報告するよう努力していくつもりである。なお、天文学に直接関係する事柄では、天文学研究連絡委員会と日食専門委員会が、また、その他の研連も近いうちに、前期 (第 13 期) どおりに発足する予定である。

* 東京大学教養学部 Daichiro Sugimoto: XXth IAU General Assembly